

自然誌 だぶり 秋

Natural history

三重自然誌の会情報誌 74号

2007年 10月

飯高町で火成岩岩脈みつかる

紀伊半島には、熊野酸性岩類、室生火砕流堆積物(以前は室生火山岩とよばれていた)、大峰花崗岩質岩、珪長質^{*1}火成岩岩脈、潮岬火成複合岩類など多くの火成岩が点在しています。これらの火成岩類は同じマグマ起源でないと考えられていましたが、檀原ら(2007)によると、記載岩石学的特徴、ジルコンのフィッシュトラック年代および古地磁気方位などの共通性から同時期(約1500万年前)の関連した火成活動の産物と考えられ、同一マグマ起源であることが示唆されてきていると述べています。紀伊半島中央部には、東西30km、南北40kmの範囲に南に開いた馬蹄形に似た弧状火砕岩岩脈群が秩父帯の岩石を貫いて分布しています。その中で最大のものは約30~40mの幅を有していて、本質^{*2}岩片と異質^{*3}岩片が混在するタファイト(写真1)からなり、本質岩片として溶結凝灰岩の角礫状岩片を含んでいます。また、この岩脈の近傍には石英斑岩岩脈(写真2)が分布しています。これらの岩脈の東端が松阪市飯高町宮ノ谷、奥ノ平谷に部分的に分布しています。今後、これらの岩脈の詳細な研究をしていく必要があります。



写真1 タファイト(宮ノ谷産)



写真2 石英斑岩(奥ノ平谷産)

- * 1 岩石のほとんどが微晶質な石英と長石の集合体からなる組織をもつもの。
- * 2 噴火に直接関係したマグマの固結したもので、たとえば軽石・スコリヤ(岩滓)などがあります。
- * 3 噴火活動にかかわりのない岩片で、たとえば基盤岩の破片などがあります。

〈津村善博：松阪市嬉野宮古町950〉

2006年～2007年に新種記載された三重県の甲虫類

生川 展行

昆虫の中で最も種類数の多い甲虫類は、日本では1万種以上が記録されており、毎年数多くの新種が記載されています。今までに三重県内で採集された標本を基に、新種として記載された種も少なくありません。

今回は、2006年～2007年発行の学会誌に掲載された新種記載論文の中で、三重県内で採集された標本が、ホロタイプやパラタイプとして指定された甲虫の新種や新亜種を紹介します。

ハネカクシ科

Lathrobium isense Y. Watanabe, 2006

イセヒメコバネナガハネカクシ

Lathrobium nankiense Y. Watanabe, 2006

ナンキヒメコバネナガハネカクシ

Stenus kishimotoi Naomi et Puthz

Stenus yokozeckii Naomi

Stenus tateoi Naomi

Stenus (Hypostenus) agrestis Naomi, 2006

Stenus (Hypostenus) olliformis owasenus Naomi, 2006

Stenus (Hypostenus) ichikawai Naomi, 2006

Stenus (Hypostenus) ingens ingens Naomi, 2006

Stenus (Hypostenus) ingens ryugadakensis Naomi, 2006

Stenus (Hypostenus) lubomiri Naomi, 2006

Stenus (Hypostenus) ichihashii Naomi, 2006

Stenus (Hypostenus) productus Naomi, 2007

Stenus (Hypostenus) amagasui Naomi, 2007

コガネムシ科

Myrhesus yorikoeae Ochi, Kawai et Inagaki

ハバヒロコケシマグソコガネ

コメツキムシ科

Dalopius peninsularis Kishii, 2006

ホソクロヒメコメツキ

テントウムシダマシ科

Dexialia sasajii Narukawa, 2007

ウスモンマルガタテントウダマシ

ナガクチキムシ科

Lederina narukawai Ishikawa et Sakai, 2007

トゲノミナガクチキ

ゾウムシ科

Phyllobius (Subphyllobius) variabilis Morimoto et Miyakawa, 2006

チビヒゲボソゾウムシ



写真1 ハバヒロコケシマグソコガネ

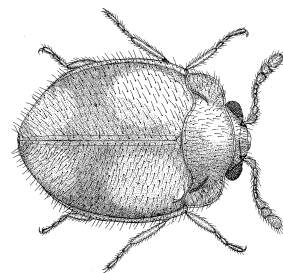


図1 ウスモンマルガタテントウダマシ

Phyllobius (Otophyllobius) kumanoensis Morimoto et Miyakawa, 2006

クマノヒゲボソゾウムシ

Phyllobius (Subphyllobius) ichihashii Morimoto et Miyakawa, 2006

イセヒゲボソゾウムシ

Drymophoetus komonoensis Kojima et Morimoto, 2006

コモノクチブトゾウムシ

私が見落とした新種記載論文もあるかもしれませんが、5科で20種2亜種が新種記載されました。特にハネカクシ科の *Stenus* メダカハネカクシ属は、10新種2新亜種と最多となりましたが、これは最近このグループの研究が進められているためです。

学名の種小名に、三重県の甲虫類を調べている市橋甫さんや天春明吉さん、市川太さん、稲垣順子さんの名前が付いた甲虫もあり、私の名前を付けていただいた種もありました。やはり、新種に自分の名前が付くことは嬉しいことです。

〈なるかわ のぶゆき：鈴鹿市役所環境部〉

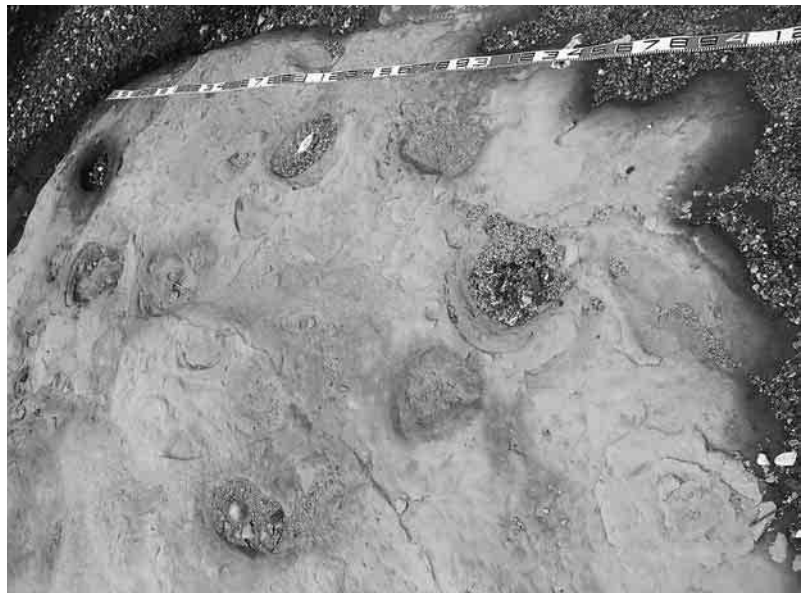
東海層群でゾウの足跡化石などがみつかる

津村 善博

東海層群は、鮮新世～前期更新世(520万年～170万年くらい前)に氾濫原や河川に堆積した地層で、伊勢湾を囲んで分布しています。厚さは2000m以上です。その層相は、基本的に厚さ数m～数10mの半固結の粘土層・シルト層・砂層・礫層が繰り返して累重するものですが、層準的にも側方的にもはなはだ層相変化に富んでいます。また、数十枚の連続性に富む火山灰層が挟まれています。

このたび、三重県内の東海層群から足跡化石が発見されました。滋賀県足跡化石研究会の岡村喜明氏は、亀山市の鈴鹿川河床、中ノ川河床、鈴鹿市の御幣川河床に多くの足跡化石が現れており、その種類は、ゾウ、偶蹄類、ワニ、鳥類などと語っています。

亀山市の鈴鹿川河床の足跡化石調査は亀山市歴史博物館が8月下旬に実施しました。その調査結果が期待されます。また、鈴鹿市の御幣川についても調査が待たれます。これらのことから、東海層群の古環境などを解明する手がかりがさらに得られることを願っています。



御幣川のゾウ足跡化石(提供・岡村喜明氏)

〈つむら よしひろ：松阪市嬉野宮古町950〉

鈴鹿市小岐須溪谷の石灰岩

津村 善博

小岐須溪谷付近には石灰岩が分布しており、その石灰岩をセメントの原料などとして採掘しています。また、一帯には洞穴がいくつも形成されています。小岐須の石灰岩の特徴を解説します。

炭酸塩を主な成分とする堆積岩を総称して炭酸塩岩といいます。炭酸塩岩の中で、石灰岩は最もよく知られている岩石です。その中にはしばしば保存のよい化石が多く含まれているので、地質時代や堆積環境の推定に役立ちます。

炭酸塩岩とはその構成鉱物が50%以上が炭酸塩鉱物からなるもので、それらの鉱物には方解石、あられ石、ドロマイト、シデライト、菱マンガン鉱、マグネサイトなどがあります。炭酸塩岩を構成するものとして、碎屑粒子、生物骨格粒子、非生物粒子などがあります。その中で、生物骨格粒子は、石灰藻の植物源と造礁サンゴ、有孔虫、腕足類、軟体動物、コケムシなどの動物源に分けられます。また、非生物粒子としては、ウーイド（魚卵石）、ペロイド、イントラクラストなどがあります。

石灰岩の主成分である炭酸カルシウムは海洋の深さによって大きく左右されます。それは、海洋では炭酸カルシウムの溶解度は水深の増大に比例し、深海に到達した浅海での生物起源の石灰質の物質は溶解してしまい、堆積物にはなりません。その深さを炭酸塩補償深度（CCD）といい、一般に大洋底では約4,000mであると考えられています。

小岐須の“石灰岩”をふくむ地層は菰野層群とよばれ、下部の入道ヶ岳層と上部の雲母峰層に分けられ（図1）、美濃帯に属しています。

美濃帯を構成する堆積岩コンプレックスは、海洋性岩類と陸源碎屑岩類とが混合する複雑な層相を呈しています。特に、泥質基質と種々の岩質・サイズの岩塊からなる岩相（以下混在岩相と呼ぶ）と覆瓦構造の発達で特徴づけられます。

これらの諸特徴は、海洋プレートが大陸縁で沈み込むことによって、その上にあった海洋プレート起源の緑色岩・石灰岩・層状チャートと、大陸縁に堆積した砂岩及び泥岩などの陸源堆積岩類とが混合・変形し、陸側に付加された結果形成されたと考えられています。このため、こうした複合岩類は付加コンプレックスと呼ばれています。

鈴鹿市内の付加コンプレックスは宮妻峽～入道ヶ岳～小岐須溪谷と野登山南西方に分布しています。これらの付加コンプレックスができた時代はジュラ紀と考えられています。

入道ヶ岳層は入道ヶ岳を中心に分布し、主として泥岩・砂岩からなり、上部には石灰岩およびチャー

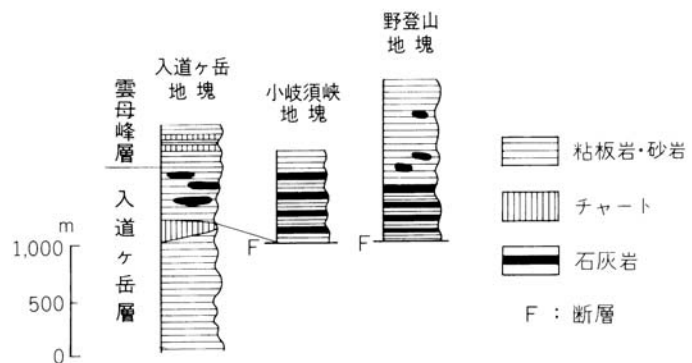


図1 鈴鹿市小岐須溪谷付近に分布する菰野層群の層序図

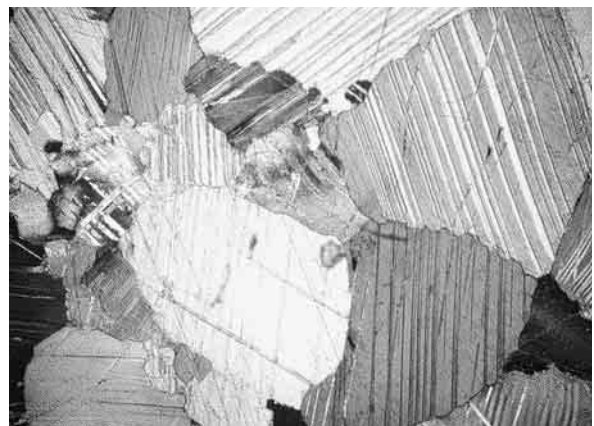


写真1 石灰岩の顕微鏡写真クロス

トを挟んでいます。石灰岩は灰白色または灰黒色を呈し、厚さ10m以上の層状または厚さ数mほどのレンズ状を呈する場合と泥岩と互層をなす場合とがあります。石灰岩は鈴鹿花崗岩類などによる比較的低温の接触変成作用をうけて、粗粒の方解石からなる変成岩すなわち方解石マーブルとなっています(写真1)。変成を受けているため、化石は見るできません。

屏風岩(写真2)は方解石マーブルからなり、御幣川の侵食で石灰岩独特の浸食地形を呈していて、三重県の天然記念物に指定されています。



写真2 屏風岩(三重県天然記念物)

〈つむら よしひろ：松阪市嬉野宮古町950〉

偕楽公園のアオバズク

田村 香里

2007年7月15日の午後5時頃、博物館に「偕楽公園内のヤマモモの樹からアオバズクの幼鳥が落ちている。このままでは死んでしまうので、何とかしてほしい。」と公園を散歩中の方から連絡がありました。案内されて現地に行ってみると、大きなヤマモモの樹(写真1)の幹に地上30cmほどの高さのところ、うずくまっているアオバズクの幼鳥がいました(写真2)。幼鳥と言っても大きめであり、体長は15cmほど、顔の周りに産毛が少しだけ残っていました。野鳥の会の先生に電話で問い合わせたところ、今は巣立ちの時期であり、飛び立つのに失敗して落ちる個体もあるとのことでした。つつかれないように手袋をはめて、木の上の方の枝に乗せてあげると、飛び立つことができましたので、そのようにしました。

アオバズクは、毎年同じ所で繁殖する渡り鳥で、平地から標高1000mまでの山地にいます。日本では5月頃から10月頃まで見ることができます。夜行性で、スズメガやヤママユガ、コガネムシなどの大型昆虫や小動物を食べています。ホッホッ、ホッホッと2声づつ区切って鳴きます。比較的街中でもいるので、5月頃からは頻繁に声を聞くことができます。5月～7月頃、白い3卵を2～5個産み育てます。

うずくまってじっとこちらを見ている金色の大きな目が印象的でした。アオバズクの親鳥が、ようすを見守っているかのように、少し離れた枝にいました。無事、巣立ちをして、また姿を見せてほしいものです。



写真1 ヤマモモの木



写真2 アオバズク幼鳥

〈たむら かおり：三重県立博物館〉

県立博物館の閉館に思う

清水 善吉

皆さんも新聞記事等でごらんになったかと思いますが、三重県立博物館の展示部門が本年10月10日をもって閉鎖しました。新聞などには「事実上の閉館」と書かれていますが、県民の質問や相談に答える窓口を別棟に移し、オオサンショウウオの公開は続けることで県民サービスの低下を防ぐそうです。しかしながら、県博に対して相談業務のニーズはあまり高いとも思えませんし、オオサンショウウオについても2本足で直立歩行をするわけでもありませんので、早晩に不必要論が出てくると思われる。だいたいこの程度の業務をもってして県民サービスと言える体質が一番の問題かなとも思えます。

私としては、なんといっても博物館なのですから、生きものの多様性についての基礎的な調査研究や資料の収集保管に特化した活動を行う、と言ってほしかったです。以前、県自然環境室に勤務していたおりに、これらの事業について予算を要求したことがありましたが、特に後者については博物館の業務であるということでバツサリと切られました。今になって思えば、元来そんな機能のない部署で標本を保管しても、担当者が変わっていけばゴミとなっていくのは明白ですので、予算がつかなくてよかったのですが、では博物館でといかないところがつらいところです。

それにしても、全国有数の古い活動歴を誇る三重県立博物館の閉館を伝える記事が、地方版のベタ記事扱いとはあまりにも寂しく(図1)、また、県民から閉館反対の声がまったくあがらなかったことに、過去に同館で働いたことのある私は少々落胆しました。現在、同館で働いている方々の気持ちはいかばかりのものでしょうか。当事者の迷惑になるといけませんのでお名前はあげませんが、本会の会員になっていただいている方も同館には3名おみえですので、本誌でも生の声をお聞かせいただきたいと思います。

本会の活動目的のひとつに、「三重県立博物館を盛り上げる」があり、最近では同館の方針により疎遠となっておりますが、以前はさまざまな共同事業を行ってきました。また、本会だけにとどまらず、同館54年の歴史の中ではさまざまな団体が関わってきたことと思います。われわれ自然誌系の活動を行っている者にとっては、あの県立博物館でも唯一の拠点であっただけに、閉館は大きな痛手です。そこが、人文系分野と異なるところです。

昨年11月の(財)日本カモシカセンターの閉館につづいて県立博物館、なにやら日本サンショウウオセンターの規模縮小も取りざたされています。各地でこの分野の拠点施設がつぶされていくのは偶然ではないでしょう。為政者(大人)にとって自然とは遠い存在であり、経済活動の中でしか位置づけがなされていないためだと思われます。今、新しい博物館のあり方についての審議が行われている。

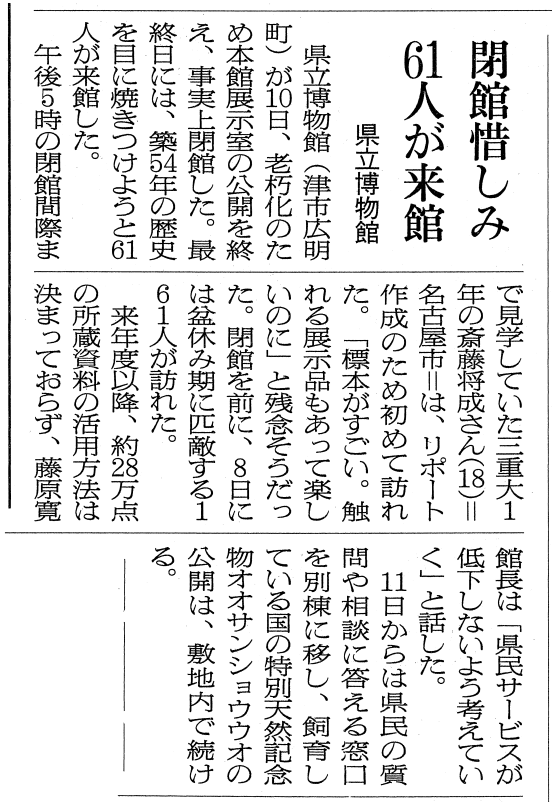


図1 2007年10月11日付け朝日新聞三重版

ようですが、何をするための博物館であるかについて十分な議論をお願いしたいです。

さて、新博物館建設については、最速で進んだとしても今後10年程度はかかると思われます。拠点の空白化を避けるために、平成14年に県議会で採択された「自然系博物館の整備を求める請願」の要望事項のひとつである「新博物館建設までの当面の間、自然誌系拠点施設の整備」を三重県にはお願いしたいと思っています。

〈しみず ぜんきち：松阪市日丘町1386-17〉

阿漕浦海岸に大量の魚貝類の死骸を確認

今村 隆一

2007年10月3日に津市の阿漕浦海岸に出向き、砂浜での自然観察をする機会を得ることが出来たので報告します。歩いたコースは、御殿場海岸の北側の浜から津海浜公園にあるヨットハーバーにかけておよそ3kmの距離を波打ち際に沿って行っています。そこには、多数の魚貝類の死骸がうちあげられている光景が広がっていました。当日は、今にも雨が降りそうな天気のため、海の様子ははっきりしなかったのですが、薄日がさしたときの海は、赤く染まった色として現れたのです。まさしく海は、赤潮におおわれていたのです。その赤潮によって、多くの魚貝類が死んでしまったようです。死骸の中には、まだ弱った状態で生きているものも見られました。その死骸をあさるかのように、セグロカモメやカワウの鳥たちが多数集まっていました。

一番多く見られた生き物は、二貝類のバカガイ(写真1)です。そのほかには、二貝類のマテガイ、シオヤガイ、シオフキ、カガミガイ、ムラサキイガイ、アサリ、ハマグリ(三重県 RDB2005：絶滅危惧Ⅱ類)、フジノハナガイ(三重県 RDB2005：準絶滅危惧)、巻き貝類のツメタガイ、アカニシ、ヤドカリ類のコブヨコバサミ(アカニシの貝を宿にしていた)、カニ類のアミメキンセンガニ、タイワンガザミ、魚類のボラ、サヨリ(写真2)があげることができます。



写真1 打ち上げられたババガイ



写真2 サヨリの死体

その後10月5日には、伊勢湾の南部地域の伊勢市二見にかけて赤潮が見られることを新聞やニュースの報道があり、今回の伊勢湾での赤潮の発生は、かなり広範囲であったようです。今年の8月から9月は、高温と小雨傾向であったため赤潮が発生しやすい条件が重なったのではないのでしょうか。しかしそれだけの原因なのでしょうか？

この赤潮によって多くの魚貝類が犠牲になったことは、いたたまれない気持ちになってしまいます。赤潮が発生しない海にするためには、自分がまずできることは何か、普段の生活からできることから実行していかなければならないと改めて考えさせられます。

〈いまむら たかかず：津市久居元町1993-1〉

事務局から

○新博物館整備のあり方についての県審議会、開催中

文化政策、都市政策・建築、芸術・歴史・生活文化、環境・自然、学習・教育、メディア、企業メセナなどの分野において、学術的・専門的な視点、地域や現場の視点から選考した学識経験者等の15名の方々に、新博物館整備のあり方が検討されています。これまでに2回の審議会が行われており、県生活部のHPでその内容が紹介されていますので、のぞいてみました。あんまりだ!!と思うほど自然についての意見は出されていませんが、「新博物館のあり方部会」の委員先生方の専門分野をみれば納得がいきます。環境・自然分野だけが委員先生がいないのです。確か、平成14年2月に県議会で「自然系博物館の整備を求める請願」が採択されているはずですが、この事態をどのように理解したらよいのでしょうか。また、三重県の政策課題でもある生物多様性の確保等についても、博物館の果たすべき役割は決して小さなものではありません。せめて、審議会やこの後に設置されるであろう検討会にはこの分野の専門家を加えてように求めていきたいと思えます。新博物館のあり方部会の内容については、三重県生活部をインターネットで検索し、「三重の文化」→三重の文化振興方針（仮称）について、をご覧ください。一度のぞいてください。

○会費納入をお願いします。

2007年会費未納の方は（納入状況が不明の場合は事務局までお問い合わせ下さい）、よろしくお願ひします。また、退会される場合はご一報ください。

○会誌発行

大変送っておりました会誌「三重自然誌11号」をやっと発行することができました。次号もなるべく早く出したいと思えますので、ふるってご投稿下さい。

○シンポジウム 紀伊半島の野生生物開催のお知らせ

紀伊半島の野生生物をテーマに、3県の持ち回りで毎年開催されているイベントです。今年は奈良県の当番で「紀伊半島に生息する外来生物について考える」をサブテーマに下記の日程で開催されます。詳細は同封のチラシをご覧ください。

開催日時 2007年11月23日（金）13：00～16：30

会場 ウェルネス・イン大和路（桜井市山田299 TEL0744-43-8606）

編集後記

久しぶりの編集になりました。原稿をお寄せいただいた方にお礼申し上げます。さて、最近三重県で地学事象の発見が続いています。鈴鹿川河床や御幣川河床でゾウ、ワニなどの足跡化石、小岐須溪谷での岩脈群、飯高町の中央構造線付近での和泉層群の分布、宮ノ谷の火砕岩岩脈などがあります。まだまだ三重県には未調査のところが多くあります。これらの発見は三重の土地の成り立ちばかりでなく、日本の地史ひいては地球史を解明していく手がかりになります。これからも新たな発見が待たれます。情報がありましたら連絡をお願いします。（津）

自然誌だより74号

発行日 2007年10月25日

事務局 〒515-0835 松阪市日丘町1386-17

清水善吉方 三重自然誌の会

<http://www.zb.ztv.ne.jp/mie-shizenshi>

発行者 三重自然誌の会

郵便振替口座 00800-5-17842 三重自然誌の会

年会費 1,500円（個人）/2,000円（家族）

e-mail:mie-shizenshi@zb.ztv.ne.jp